

Ⅱ. まとめ

1. 土器

本遺跡から出土した土器は、縄文時代前期後葉から晩期にかけてのものである。中心をなしているのは、中期前葉、大木7b式、8a式の土器である。本報告書の分類では7b式期の出土土器については、原体の側面圧痕及び連弧文或いは波状文の有無で、7a式及び8a式と区別し、8a式の土器については、キャリパー形の器形をもち、沈線或いは隆帯による施文するもの、7b式で目立った原体側面圧痕が消滅するものを分類した。しかし、いずれの分類でも、分類することが不可能な個体も多かった。その中でも1671は口縁部隆帯文に沿って原体側面圧痕を行い、波頂部に方形または菱形の突起をもつものである。この特徴を持つ土器は、県内よりも隣県の宮城県小梁川遺跡、同県中ノ内A遺跡出土の土器に類似しており、南方からの影響を示すものであろう。1333は波頂部にボタン状の貼付、三角形刺突文、沈線による渦巻文をモチーフとする文様が土器底部付近まで広がるものである。同時期の県内の類例はなく、器形や文様は遠く北陸地方新崎式に類似するようだが施文方法が異なるなどの相違点があり詳細は不明である。また、本報告書遺構編のまとめでも述べたが、8a式に相当と見られる47号住居跡出土の台付深鉢についても県内ではあまり類例が無く、福島県、山形県で類例があるらしい（筆者は未見である）。

そのほかに、双口土器が1点出土しているが、県内での出土例は、盛岡市（旧都南村）湯沢遺跡（岩埋文センター調査報告書第66集1977）の1点のみだが、類似した土器としては松尾村長者屋敷遺跡（岩埋文センター調査報告書第77集1984）で三口の土器が1点出土している。両遺跡の双口及び三口土器とも、内部は境目が無く繋がっており、空洞になっている。本遺跡のそれは完形ではないので残存部分で見ると、二つの口がそれぞれ区切られ区切られていたようである。いずれにしても類例が少なく、用途等は不明である。

また、本遺跡で検出された7b式から8a式期に限定された捨て場は、同時期の新旧関係を理解する上で、貴重と思われるが、グリッドによって若干層位のずれがあるのか地点によっては、新しいと見られる土器が下位の層からも出土している問題点がある。そこで層序による土器型式の新旧関係の把握はグリッド毎で留めた。

2. 石鏃

石器の内、石鏃が掲載石器（2007点）全体の約68.8%を占める。その内訳は下記に示す。

石鏃（1381点）	A	凹基無茎	895 点 (64.8%)
	B	平基無茎	106 点 (7.7%)
	C	入凹基	3 点 (0.2%)
	D	凹基有茎	13 点 (0.9%)
	E	平基有茎	94 点 (6.8%)
	F	凸基有茎	29 点 (2.1%)
	G	尖基	9 点 (0.6%)
	H	円基	16 点 (1.2%)
	I	未製品及び断片（A～Hに分類できない破損品？）	216点 (15.6%)

これを見ると凹基石鏃が全体の約64.8%と半数以上を占める。時期毎の形状比較は、遺構の同一箇所での重複が多く、古い遺構を掘り起こして新しい遺構を構築しているため、遺構出土の遺物であっても必ずしも出土した遺構と時期を同じくする遺物ではない可能性があるため、行えなかった。

本遺跡出土の石鏃が他の縄文時代の遺跡に比較して小型のものが多く、時期が異なる3遺跡と重量分布の比較を行った。前期の湯田町清水ヶ野遺跡、前期から中期の盛岡市上八木田Ⅰ遺跡、晩期の北上市九年橋遺跡（第3次～11次）である。資料はそれぞれの調査報告書掲載の観察表を基に、完形品に限定し0.2g毎に点数を計測した。4.2g以上については点数が散在するので一括している。遺跡によって出土数が異なるため、分布は百分率で表した（表1、第255図）。清水ヶ野遺跡については出土点数304点中、掲載が73点と少なくなっているため、若干偏在している可能性もある。

この重量分布図を見ると、清水ヶ野遺跡は2.0～2.4gと2.8～3.2gの2カ所で多い傾向を見せている。上八木田Ⅰ遺跡では0.6～2.2gの範囲が多く、重量に偏りがなく、どの重さの石鏃も出土している。九年橋遺跡では、0.4～1.2gと先の2遺跡より軽量化の傾向を示している。清水ヶ野遺跡については前述したように重量分布に偏りがあるが、2.0～3.2gと他の遺跡よりも重い石鏃が多いことを表している。また、上八木田Ⅰ遺跡については、その他の遺跡よりも時代幅があるために分布幅も広がったものと考えられる。

表1 各遺跡の完形石鏃の重量分布と百分率

重量g	点 数			
	清水ヶ野	清田台	上八木田Ⅰ	九年橋 3次～11次
0～0.1	0	16	0	0
0.2～0.3	0	156	3	10
0.4～0.5	0	145	5	38
0.6～0.7	1	102	19	55
0.8～0.9	1	67	16	51
1.0～1.1	2	27	15	31
1.2～1.3	4	23	25	27
1.4～1.5	4	16	24	34
1.6～1.7	4	9	18	10
1.8～1.9	4	12	19	11
2.0～2.1	7	9	23	10
2.2～2.3	6	11	11	12
2.4～2.5	4	1	15	4
2.6～2.7	3	1	7	9
2.8～2.9	7	3	11	4
3.0～3.1	6	3	12	6
3.2～3.3	5	2	3	6
3.4～3.5	3	2	5	2
3.6～3.7	3	0	4	4
3.8～3.9	1	2	3	2
4.0～4.1	1	1	1	1
4.2～	6	8	7	38
合計	72	616	246	365

重量g	百分率(%)			
	清水ヶ野	清田台	上八木田Ⅰ	九年橋 3次～11次
0～0.1	0.0	2.6	0.0	0.0
0.2～0.3	0.0	25.3	1.2	2.7
0.4～0.5	0.0	23.5	2.0	10.4
0.6～0.7	1.4	16.6	7.7	15.1
0.8～0.9	1.4	10.9	6.5	14.0
1.0～1.1	2.8	4.4	6.1	8.5
1.2～1.3	5.6	3.7	10.2	7.4
1.4～1.5	5.6	2.6	9.8	9.3
1.6～1.7	5.6	1.5	7.3	2.7
1.8～1.9	5.6	1.9	7.7	3.0
2.0～2.1	9.7	1.5	9.3	2.7
2.2～2.3	8.3	1.8	4.5	3.3
2.4～2.5	5.6	0.2	6.1	1.1
2.6～2.7	4.2	0.2	2.8	2.5
2.8～2.9	9.7	0.5	4.5	1.1
3.0～3.1	8.3	0.5	4.9	1.6
3.2～3.3	6.9	0.3	1.2	1.6
3.4～3.5	4.2	0.3	2.0	0.5
3.6～3.7	4.2	0.0	1.6	1.1
3.8～3.9	1.4	0.3	1.2	0.5
4.0～4.1	1.4	0.2	0.4	0.3
4.2～	8.3	1.3	2.8	10.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

本遺跡は、0.2～0.8gの石鏃が多く他の遺跡よりもより軽量の石鏃が出土している。晩期に石鏃が軽量化する傾向があり、晩期がメインの九年橋遺跡でもそのことを如実に表している。本遺跡は晩期の遺物も多少出土しているが、中期の遺物に比べると微々たるものである。本遺跡の軽量石鏃は晩期に石鏃が軽量になる傾向があるというだけでは説明できない。中期の遺構がメインに存在し、長さが1cm以下で重量が0.2～0.3g位の石鏃が最も多いことは他の遺跡に比べて特徴的なことである。このような石鏃は、実用の道具というより模造品と考えられる。

第255図 石鉄重量分布

